

梁啓超における中国史叙述 ——「専制」の進化と「政治」の基準（一）

朱 琳

Abstract

Taking its cue from the three “encounters” in the acceptance of an evolutionary theory, using the evolution of “despotism” and the basis of “politics” as keywords, this paper focuses on the Chinese historical accounts of Liang Qichao (梁啓超), which has not been systematically considered up to now, and aims to clarify the features thereof.

Firstly, it analyzes in detail the three “encounters” of Kang Youwei (康有為)’s “The Thesis on the Three Stages to Datong (大同)”, Yan Fu (嚴復)’s “*Evolution Theory* (天演論)”, and the evolutionary theory via Japan. Next, it clarifies the concrete application to the Chinese history, as well as the diagram of political system evolution presented by Liang Qichao. Furthermore, it considers the proposed new world view based on such application, and the discourse on “The Second Warring States Period”. Finally, it casts in sharp relief the features of the Chinese historical accounts of Liang Qichao, while comparing the Chinese history discourse of Naitō Konan (内藤湖南), which is widely known through the “Tang-Sung Transition, Modern Sung Dynasty (唐宋变革、宋代近世)” discourse (in short, there was a great transition between the Tang and Sung Dynasties, and the period after the Sung Dynasty is taken as the Modern Period).

はじめに

一 進化論との三つの「出会い」

- 1 嚴復の『天演論』との出会い
- 2 康有為の「三世進化説」との出会い
- 3 日本経由の進化論との出会い（以上本号）

二 政体進化の図式と中国史への適用

三 新たな世界像の提起と第二の「戦国」

四 内藤湖南の中国史論と比較しながら

おわりに

凡 例

* 梁啓超の文章の初出情報は、基本的に李国俊『梁啓超著述系年』（復旦大学出版社，1986年）による。梁啓超の文章の引用に当たっては、読みやすさと検証の便を図るため、『飲冰室文集点校』全六集（梁啓超著，呉松・盧雲昆・王文光・段炳昌点校，雲南教育出版社，2001年）の該当頁数を記す。『飲冰室文集点校』に収録されていない文章に関しては、『梁啓超全集』全十卷（梁啓超著・張品興ほか編，北京出版社，1999年）と『飲冰室合集』集外文』（上，中，下）（梁啓超著・夏曉紅編，北京大学出版社，2005年）の該当頁数を記す。なお，字数の関係で，中国語の文章に関しては，本文中，基本的に原文を省略し，既出の翻訳あるいは筆者による翻訳のみを記す。

*内藤湖南の文章の引用は特に断りのない場合、すべて『内藤湖南全集』全十四巻（神田喜一郎・内藤乾吉編、筑摩書房、1969-76年）による。

はじめに

日清戦争の敗北により、北洋艦隊に象徴される洋務運動が破綻し、中国の政治状況は急速に変化し始めると同時に、列強の中国進出、勢力圏分割の競争が一層激しくなった。その際、かつて文化的な師として仰がれた中国は、日本とは対照的に「文明化」の落伍者となったかのように捉えられた。強い危機意識のもとで、「中体西用」論のもとで西洋の機械や技術のみを導入する政策にかわり、清朝の現状を



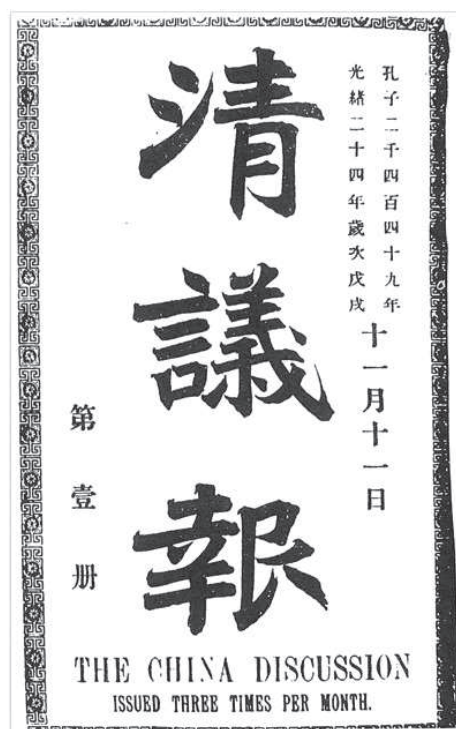
梁啓超（1873-1929）

批判しその政治体制の抜本的変革を求めようとする中国知識人の変革運動が始まった。政治体制の未来の選択肢として、立憲君主制にしる、共和制にしる、二千年以上続いてきた君主専制体制を変えなければならない、ということがそれらの運動の担い手たちの共通した時代認識であった。

しかし、「百日維新」（1898年）と呼ばれる変法志士による「自強」運動は、その名の通りわずか百日あまりで挫折して失敗に終わった。そして、「新政」（1901年以降）と称される清朝政府の必死の延命策も、結局自らを滅亡の危機から救いあげることではできなかった。そこで迎えたのが辛亥革命（1911年）であり、長期にわたって続いた王朝体制を打倒し、アジアで最初の共和制国家を作り出す大変動であった。

その約二十年間を挟んでの中国の変貌をどう受け止めるべきか、立ち遅れたかのように見える中国をどう改革していくべきか、という問題は中国の知識人が模索しつつある課題であった。彼らは単に

中国がこれから進むべき道の転換を求めただけでなく、中国がこれまで歩んできた歴史の再検討を求め、新たな観点から中国史を再構成しようとした。こうした新たな中国史像を求める運動が直面している問題は、目の前の変革をどのような理論によって過去—現在—未来という歴史の長い流れのなかに位置づけて正当化するかにあった。そうした時代区分を含むそれまでの中国史像の再構築の先頭に立ったのがほかでもなく梁啓超（1873-1929）なのである。彼は「中国史叙論」（1901年）、「新史学」（1902年）を発表し、「史界革命」のスローガンを掲げ甚



大な影響を及ぼした。さらに、1920年代に入って、『中国歴史研究法』（1922年）、「研究文化史的幾個重要問題」（1923年）、『中国歴史研究法補編』（1926-27年）など史学に関する一連の重要な著述を発表した。

変法運動ですでに頭角を現していた梁啓超は、変法失敗で日本に亡命した後、自ら創刊した『清議報』・『新民叢報』を拠点とし、中国の動向に目を向けつつ精力的に西洋思想の紹介などに取り組み、「哀時客」、「少年中国之少年」、「愛国者」、「中国之新民」、「飲冰室主人」などの筆名で活発な言論活動を行なった。東西古今の歴史的挿話や偉人伝を織り交ぜ、豪華絢爛かつ煽動的な美文をもって論じ、当時の若者たちの感触をくすぐり、陳独秀（1879-1942）、胡適（1891-1962）、魯迅（1881-1936）、毛沢東（1893-1976）、郭沫若（1892-1978）をはじめ、多くの中国人に深い感動を与えている。後年、彼は、思想的に最も先鋭化したこの時期の言論活動を、いささかの反省を込めて回想しながらも、沈滞を打破した自らの役割を「新思想界の陳渉」になぞらえ、先駆者としての自負を示した⁽¹⁾。



梁啓超は、広くかつあさいことを求めた。ある学問が、いささかでも自分の専門とかかわるならば、すぐ論評の対象とした。ゆえにその著述は、曖昧模糊として、いいかげんで大ざっぱな話が多く、はなはだしいばあいには、まったく誤りであることもある。自分でそれを発見して、自分で訂正しようとするれば、前後相矛盾する。平心に論ずるならば、二十年前の思想界の沈滞閉塞ぶりは、このような思いきったあらっぽい手段をとるののであれば、野山を焼きつくして新局面を開くことはできなかったのである。この点について論ずるならば、梁啓超は新思想界の陳渉と言うべきであろう。⁽²⁾

これまで梁啓超に関しては、数多くの論著が発表されており、研究の蓄積は非常に厚く、参考になるものが少なくない⁽³⁾。ただし、梁啓超の「新史学」については断片的な分析があったとしても、中国史を具体的にどのように叙述したのかを時系列に考察する実証的な研究は、あまり見当たらない。また、梁啓超における進化論の受容を捉える研究は存在するが、その背後にどのような事情と特徴があるのかについては、必ずしも十分に検証されていない。そこで、本稿は「専制」の進化と「政治」の基準をキーワードに、進化論との三つの「出会い」を手がかりに、いままであまり体系的には検討されてこなかった梁啓超の中国史叙述に焦点を絞り、その特徴を解明していくことを目指す。

まず、康有為の「三世進化説」、嚴復の『天演論』、日本経由の進化論との三つの「出会い」を詳細に分析する。次に、梁啓超の提示した政体進化の図式および中国史への具体的な適用を解明する。さらに、それに基づく新たな世界像の提起と第二の「戦国」論を検討する。最後に、「唐宋変革、宋代近世」論で広く知られている内藤湖南の中国史論と比較しながら、梁啓超における中国史叙述の特徴を浮き彫りにさせることを目指す。

一 進化論との三つの「出会い」

19世紀後半、ダーウィンの自然進化論とスペンサーの社会進化論は、西洋の人々、とりわけ神とその世界創造を認めるキリスト教信者の思考や信仰に、大きな衝撃を与えていた⁽⁴⁾。その衝撃について、梁啓超の言葉を借りて言えば、「キリスト教徒はそれを仇と見なし、数百年前にあった地動説への反対と同じように、全力を尽くしてそれに反抗した」のである⁽⁵⁾。そして、この進化論は日本と中国にも伝来して広がり、日本では明治十、二十年代、中国では日清戦争後、それぞれ一世を風靡した。日本と中国は、進化論の受容時期においては、十年以上の時間差があったにもかかわらず、進化論の東漸とともにブームが起こり、三代を理想としその時代に立ち返ることを求める儒教的尚古史観と、治と乱が交互に循環するとした循環史観が否定され、発展的歴史観がもたらされた点においては、共通している。同時代人の証言からその流行の一端がうかがえる。

例えば、三宅雪嶺（1860-1945）は、「進化の語は翼を生じて飛び、新知識に心懸ある者は頻に進化を口にし、進化とさへ云へば問題は解決せらるゝかに考へた」と述べている⁽⁶⁾。そして、末広重恭（鉄腸）（1849-1896）は、政治小説のなかで、「五六年前マデハ書生ノ喜ビテ談スル所ハポックルギゾーミル氏ノ著書ナリシガ近來ハ一変シテスペンサアトナリ「スタチック」「スタアデー、ヲフ、ソシオロジー」ノ如キハ家々ノ帳裏ニ此ノ書アリ以テ夫ノ王充ノ論衡ニ比スベシ亦盛ンナリト謂フベキナリ」という⁽⁷⁾。また、当時まだ中学生であったが、後年「新文化運動」の旗手となり、中国思想界の重鎮となった胡適（1891-1962）は、次のような回顧談を残している。

「天演論」を読んだり、「物競天択」の文章を作つたりするといふことは、みなあの時代の風潮を物語るに足るものである。「天演論」は出版後数年ならずして、全国を風靡し、たうとう中学生の読み物にまでなつたが、この本を読んだ人の中、ハックスレーの科学史上また思想上の貢献を、理解し得た人は極めて稀であつた。彼等が理解し得たのは、「優勝劣敗」の公式が、国際政治上にもつ意義だけであつた。わが国の度々の戦敗の後において、庚子・辛丑の大恥辱（訳者注、北清事変のこと）の後において、この「優勝劣敗、適者生存」の公式は、確かに一つの頂門の一針であり、無数の人々に一種の絶大な刺激を與へた。数年の中にかゝる、思想は、野火のやうに多くの若人の心と血の中に燃え広がつて行つた。「天演」とか「物競」とか「淘汰」とか「天択」とかいふ術語は、いづれも段々と新聞の文章の熟語となり、段々と愛国志士たちの合言葉になつた。更にまたあまたの人々は、これらの名詞を、好んで自分や子供の名につけたものである。（中略）私自身の名も、やはりかゝる風潮の下での記念品である。⁽⁸⁾



胡適（1891-1962）

胡適の回想にはいくつか重要なポイントが含まれている。第一に、中国における進化論は、『天演論』という書物によって紹介され、その流行が時代の風潮となった。第二に、進化論は、生物学から乖離して国際政治や社会状況を説明する理論として受け止められた。進化論によって、「劣者」としての中国と「強者」としての西洋を明確に描き出すことができるのである。第三に、西洋の干渉に対する清朝の度重なる敗北を見てきた人々は、とりわけ当時の中国の置かれた「帝国主義」的な国際環境の現状と関連するなかで、「優

勝劣敗、適者生存」という進化論の法則を理解した⁽⁹⁾。この「法則」が教えたのは、西洋による中国の分割は決して杞憂ではなく、「劣者」のままでは滅んでしまい、これを回避するためには「強者」になるほかはないということである。要するに、進化論は、列強の一段と激しい進出にともなう社会的危機感に対して、理論的裏付けと危機打開策を与えたのである。

周知のように、進化論を中国に最初に紹介したのは嚴復（1854-1921）である⁽¹⁰⁾。彼はハックスレー（Thomas Henry Huxley 1825-1895）の『進化と倫理』（*Evolution and Ethics*）を翻訳し、1898年6月に『天演論』という題名で公刊した。しかし、「晩周の諸子と相上下する」⁽¹¹⁾と評された嚴復の古色蒼然たる桐城派の文体は、若者には難解であった。実際に、進化論の普及に大いに貢献したのは、むしろ歯切れのよい平易な文体をもつ梁啓超である。胡適は次のように率直な感想を綴っている。

嚴さんの文章は、あまりにも古雅なので、若者たちが彼から受けた影響は、梁啓超の影響程は大きくない。梁さんの文章は、はつきりとわかりよい中に、濃厚な熱情を運び、その結果読者は、彼の後からついて行かずにはをれなくなり、彼の後について考へずにはをれなくなる。（中略）何となれば彼は、彼の能力を盡くして、私どもを一つの世界へつれて行つてくれるが、（中略）と共に彼は私どもの好奇心を喚び起し、一つの未知の世界を指して、私どもに勝手に探検させる。（中略）私自身梁さんには無窮の恩恵を受けた。⁽¹²⁾

一方、進化論に大きな感銘を受けた胡適とは対照的に、冷ややかな姿勢を示したのが魯迅（1881-1936）であった⁽¹³⁾。「中国では、近年、進化の語はほとんど日常のものとなり、新奇を喜ぶ者らは、この説を借りて自らの言辞を飾り、守旧の徒は、これが、人類と猿とを同列に置くことを非難し、全力を尽くして阻止せんとしている」と、魯迅は言う⁽¹⁴⁾。ここで言う「新奇を喜ぶ者ら」の筆頭に、「進化」・「生存競争」・「優勝劣敗」・「適者生存」など多くの和製漢語を中国に導入し広げていった梁啓超の名前が挙げられるであろう。

その評価はともあれ、進化論の中国での伝播において、梁啓超が中心的な役割を果たしたことは否めない⁽¹⁵⁾。彼における進化論の受容は、主に三つの異なる時期に、三つの異なる内容の進化論との出会いがあったからこそ成立した。すなわち、康有為の「三世進化説」との出会い、嚴復の翻訳した『天演論』との出会い、亡命先の日本における日本人の進化論との出会いの三つである⁽¹⁶⁾。

1 嚴復の『天演論』との出会い

1897年、嚴復に送った書簡のなかで、梁啓超は草稿段階の『天演論』を読んだ後の感想を綴っている⁽¹⁷⁾。公刊される前、いわば『天演論』に対する社会的評価が未定な段階での感想であるだけに、そこに梁啓超自身および彼のまわりの師友の率直な反応を見ることができる。

南海〔康有為〕先生は、ご大作を読まれた後、眼中に未だこれほどの人を見たことがないと言われました。穂卿〔夏曾佑〕は、どう言ったらよいかわからないほど感心させられたと言われました。ただ択種留良〔適者生存〕の論に関しては、完全にご意見に賛成できかね、やや違和感を覚えています。この書物のなかの言は、啓超らはかつて南海先生から聞



嚴復（1854-1921）

いたことがあります、十分には理解できませんでした。南海先生はこう言われました。君たちは、こういう説を新理だと怪しんではいけない。西洋人でこういう学問を治めている者は、何人もいて、何年も研究しているのだ、と。しかし、ご高著を得ることができ、この上なく喜んでいます。啓超らが南海先生から聞いたことで、この書物と異なる見解は、ほぼ二つあります。一つは出世間〔悩みの多い俗世を越えて大同の世界に進む〕のことで、もう一つは、ほぼこの書物の道理に基づきながらも、その筋道がやや複雑に展開されていることです。南海先生は、これは必ず西洋人がすでに言ったところであると言われました。しばらくしてもらった穂卿の書簡のなかで、先生〔康有為〕の言ったのがスペンサーの説ですが、ご著作のほうがよりよいという。これを聞いてよだれを流さんばかりに自制できない私に、先生〔嚴復〕は思いやりをもってそれをくださったのです。⁽¹⁸⁾

この書簡から見て、康有為（1858-1927）は『天演論』の草稿を読む前にすでに進化論のことを知っているだけでなく、それとやや異なる進化的見解を持っていることがわかる。そして、梁啓超らは『天演論』のことをおおむね肯定的に評価している。さらに、この短い書簡で、梁啓超は新しく得た進化論の観点を応用し、彼なりの歴史認識を次のように表明している。

第一に、西洋の観念や思想を受容する際、梁啓超自身をも含め、当時一種の「附会説」（西洋文明を中国の古典文明にこじつけ、中国文化の枠組みのなかにその源流を見出そうとし、西洋文明受容の正当性を主張する歴史の見方）が広く行われていた。読者層の受け入れやすさを考慮した一面があるにもかかわらず、梁啓超は嚴復の厳しい指摘を受け、それに対して反省的姿勢を示している⁽¹⁹⁾。

実は私は、日頃、人が中国の故事を引いて欧洲の政治を例証し、その長所がみなわが中国にもあると言っていることを嫌っています。これは中国のみえっぱりの悪習であり、もとよりそれをまねしようとは思いませんでしたが、しかし、新聞のなかで中程度の人のために説明しようとするれば、また往々免れがたいことでした。先生のこの論を得て考えてみたところ、中国史上、古代にこのようなもの〔議院〕が存在しないことが証明され、ますますその説の誤りを自覚するようになりました。⁽²⁰⁾

それ以後、梁啓超は尚古的歴史観を一変させた。この書簡を書く直前に脱稿した「《説群》序」では、「群」（社会・国家）は「物競」（生存競争）を展開し、強い「群」が弱い「群」を滅ぼし、次第に発展を遂げる、という群単位の「通嬪通代之理」が説かれている⁽²¹⁾。この文章ではまだ「進化」の語を見ることができないが、『天演論』を通じて得た進化論の知識がすでに分析に利用されたのである。

第二に、逆に、民主制がギリシアに見られたという嚴復の論に対して、梁啓超は『春秋』の「三世進化説」を根拠に反駁した⁽²²⁾。進化は地層のように一定の段階があって飛び越えるものではないのであり、「捩乱」→「昇平」→「太平」という世界の進み方と同じように、政体も必ず「多君」→「一君」→「無君」という不可逆的順序で発展するため、過去のギリシアは多君の世であって、太平民主の世であるはずはないという⁽²³⁾。彼は康有為の見方を引用して次のように説明している。

南海先生はかつてこう言われました。地球が文明に向かうのは、いま始まったばかりである。仮に文明全体を100%とすると、今の中国はわずか1-2%を有し、西人はすでに8-9%を有しているようなものである。それ故、中西の差が甚だしくあるように思えても、実際には西人の治もまたなお未だしの状態である、と。⁽²⁴⁾

こうして見れば、西洋と中国の文明度の差は、決して異次元の絶対差ではなく、同一線上の相対差なのである。「中国はもし今日よりこの義を明らかにさせれば、数十年後にはその強さも西洋と同じよう

になり、この百年内に文明に進むことができる」と梁啓超は信じている⁽²⁵⁾。ただし、「変異しないものは必ず滅亡する。これは不易の理である」と彼は変革を強調している⁽²⁶⁾。要するに、進化論は梁啓超にとって、中国の滅亡を意識させる迫力を持ち、彼を進化の客観的過程に直面させたものである。彼は進化論の定式で中国変革の可能性と必要性を証明しようとしているのである。

第三に、国家体制について、梁啓超は、「君主」より「民主」のほうが進化しているとする一方、中国の現状では、君主の権力をもってまず集中化を行なわなければならないと認識している。これはまさに、政治改革を唱え、立憲君主制の実現を当面の目標とする改良派の主張である。彼は、次のように述べている。

中国は今日民智が極めて低く、民情が極めてバラバラであるため、民主を実現するには、まず集中させなければならない。(中略) 民主はもとより時局を救うための良策であるが、今日民意がまだ講じられておらず、むしろまず君の権をかりてこれを転移したほうがよい。⁽²⁷⁾



康有為 (1858-1927)

2 康有為の「三世進化説」との出会い

『天演論』に紹介された進化論に接触する前に、梁啓超は、すでにそれに似たような議論に傾倒していた。それはすなわち康有為の「三世進化説」である。周知のように、梁啓超は康有為を師と仰ぎ、一時「今文学派の熱烈な鼓吹者」⁽²⁸⁾となり、抜本的制度改革を求める変法運動において、「康梁」と併称されるほど象徴的な存在である。康有為との出会いは、梁啓超にとって単にそこから新知識を得ただけでなく、新たな世界像を与えられたのである⁽²⁹⁾。康有為は「新学偽経」、「孔子改制」の説を唱え、儒教の全面的再解釈を行なった。康有為は、今文経書の『春秋公羊伝』の「微言大義」の解説を通じて孔子の描く理想的な未来像を得ることができると言い、人類は「捩乱世」→「昇平世」(小康)→「太平世」(大同)の三つの段階で進化発展するという。この「三世進化説」は、変法運動の基礎理論として提示され、絶えず古代に理想社会を求め続けてきた中国の伝統的史観と決別し、孔子の「六経」と民主制度など欧洲の政治理論とを巧みに結びつけたものである。未来にこそ理想社会があるという発展史観の提示からして、その発想の過程には進化論的要素の存在が認められる。

こういった「土着」の進化論の深い影響のもとに、梁啓超は最初、単なる三段階の進化発展という意味で、「三世進化説」を単純化させて捉えている⁽³⁰⁾。例えば、「変法通議」において、「私は、春秋三世の義として、捩乱世は力で勝る時代、昇平世は力と智慧とで勝る時代、太平世は智慧で勝る時代だと聞いている」⁽³¹⁾と言い、「世襲は捩乱世の制度で、科挙は昇平世の制度である」⁽³²⁾という。また、「啓超は、春秋三世の議を聞き、捩乱世は、国を内にさせ諸夏を外にさせ、昇平世は、諸夏を内にさせ夷狄を外にさせ、太平世は、天下は遠近大小が一つのようなものである。かつてこれを論じたが、秦以前は捩乱世で、孔子教は齊魯において行なわれ、秦以降から今日までは昇平世で、孔子教は神州において行なわれた。それ以降、太平世となろうか」⁽³³⁾という。

そして、『天演論』の刺激を受けたにもかかわらず、梁啓超は、すぐさま「三世進化説」を手放すことはせず、「外来」の進化論を「土着」の進化論と結びつけ、それをさらに発展させた。彼は、地球進化の不可逆性という動かしがたい客観的事実をもって、康有為の進化発展の思想を、一つの絶対的觀念にまで昇華させ、政治改革の基本的な方向について、「地質学の各層の石のように、その層位が凌乱してはいけない」とする「三世六別」説を提起した。彼は、これを人類の歴史の法則とした上、民政から

君政に戻るのは「公理」に反するものであると断言するにいたった⁽³⁴⁾。彼の言う「三世六別」の内容は次の通りである。

- 一、多君為政の世（「捩乱世」の政治）：①酋長の世；②封建および世卿の世。
- 二、一君為政の世（「昇平世」の政治）：①君主の世；②君民共主の世。
- 三、民為政の世（「太平世」の政治）：①有總統の世；②無總統の世。⁽³⁵⁾

梁啓超の世界認識では、アメリカ・フランスなどの国について言えば、「民政の世」であり、中国・ロシア・イギリス・日本などの国について言えば、「一君の世」であるが、全局について言えば、いまなお「多君の世」である⁽³⁶⁾。そして、中国と西洋の相違については、彼は次のように指摘している。

凡そ多君の政から民の政へ入るものは、その間に必ず一君の政を経てはじめて到達できる。異なるところは、西洋では、多君の政の運が長く、一君の政の運が短かったのに対し、中国では多君の政の運が短く、一君の政の運が長かったのである。⁽³⁷⁾

しかし、実際、進化の根拠や中身などの面において、康有為の「三世進化説」と進化論との間に大きなズレが存在していた。例えば、康有為は「三世進化説」を用いて人類社会の発展を説明するのに対し、梁啓超はそれを拡大して宇宙万物の発展を解釈するのに用いた。また、「三世進化説」に循環論の名残りがまだ残っているのに対し、梁啓超は「三世進化説」の言葉を使っている、「凡そ天下万物が変じざるをえないのは天理であり、変じて日に善に進み、天理に人事を加えることである」と述べているように、進化はすなわち進歩だと見なしている⁽³⁸⁾。そういった違いがあるにもかかわらず、梁啓超は最初の段階で、この両者を本質的に類似した思想と捉え、ほぼ違和感なく自分のなかで両立させ、さらにそれに対する確信を強め、進化論の立場から歴史や現実問題に分析のメスを入れたのである⁽³⁹⁾。「三世進化説」という先入観もあり、「変革」を求める目標を前にして、康有為の思想の枠組みから脱出するまで、「外来」の進化論よりも「土着」の進化論を用いる傾向が強かった。その姿勢は、変法の失敗で日本に亡命した後の梁啓超においても、しばらくの間、変わらなかったのである。日本で行なった講演のなかで、孔子教は「保守主義」ではなく、「進歩主義」であると強調し、彼は次のように述べている⁽⁴⁰⁾。

『春秋』立法には「三世」というものがある。一つは「捩乱世」、一つは「昇平世」、一つは「太平世」である。その意味は、世界が必ず「捩乱」に始まり、漸進して「昇平」となり、さらに漸進して「太平」になるということである。現在は過去に優り、未来は現在に優るということは、西洋人のダーウィンやスペンサーが提唱した進化の説である。中国のこれまでの旧説はみな、文明世界は古い時代に存在したもので、過去のものであるという。『春秋』の「三世」説は、文明世界が未だ実現していないもので、将来のものであるという。文明が過去のものだというと、保守の心が生じる。文明が未来のものだというと、進歩の心が生じる。（中略）故に「三世」の義を明らかにするには、必ず国政を革新することを主義としなければならない。保守固陋の因習が必ずそれによって一変される。⁽⁴¹⁾

「三世進化説」と進化論を結合させたのは、梁啓超の早期の進化観であるが、両者の比重に次第に変化が見られ、「土着」の進化論が完全に「外来」の進化論に取って代わられる。それは、「三十歳いごにはもう口をとどして「偽経」を語らず、「改制」についても多くを語らなかった」⁽⁴²⁾時期になってからのことであろう。大きな変化は1902年に訪れた。この年に発表された「保教非所以尊孔論」は、冒頭

で「この一篇は著者の数年前の論と正反対で、いわゆる我は我が矛を操って我を攻めるものである」と述べており、師の康有為との決別宣言と見なされ、「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」は、「三世進化説」を離れ進化論を完全に受け入れた象徴とされる⁽⁴³⁾。このダーウィンに関する評伝のなかで、進化論の意義について、梁啓超はいつもの独特の表現で、次のように述べている。

この四十年来、政治界・学術界・宗教界・思想界・人事界を問わず、一つの絶大なる変遷が生じた。これに先立つ数千年に比べれば、別に天地があるごとくである。それで競争とか進化とか、優者強者になることにつとめ、劣者弱者にはなるなとか、このような論議は、下は小学校の生徒から、上は各国の大政治家にいたるまで、これを口にのぼらせ、これを心に考えないものはない。その影響の及ぶところは、国と国との関係では帝国政策が出、学問と学問との関係では総合哲学が出た。他日、二十世紀の世界は、この政策、この哲学のすべてに埋めつくされるところとなるであろう。(中略)このような学術は、ただ博物家一科の学と見なすことはできない。いわゆる天然淘汰・優勝劣敗の理は、実に普ねく一切の邦国、種族、宗教、学術、人事のなかで行なわれ、大となく小となく、一にみなこの天演の大例を包括するところである。優れなければ劣り、存せざれば亡びることとその機には間髪を入れぬものがある。⁽⁴⁴⁾

梁啓超は学術そのものが世界を左右しうる勢力を持つと見なし、代表者として数人を挙げている⁽⁴⁵⁾。そのなかに入れたダーウィンについて、彼は次のように述べている。

前人は黄金世界が昔時にあり、末世が日に墮落すると考えている。ダーウィンが出現してはじめて、地球人類、ないし一切の事物は、みな進化の公理にしたがい、日に文明に赴くことを知ったのである。前人は天賦人權、人はみな生まれながら自然と得るべき権利を有すると考えている。ダーウィンが出現してはじめて、物競天摂、優勝劣敗、自ら強さを図らなければ、決して自立することに足らないことを知ったのである。ダーウィンは、実に十九世紀以後の思想を徹底的に一新したものである。故に凡そ人類の智識の及びうる現象なら、進化の大理を貫通させないものはないであろう。(中略)ダーウィン以前を一つの天地、ダーウィン以後を別天地と見なしてもよい。⁽⁴⁶⁾

3 日本経由の進化論との出会い

康有為の「三世進化説」、嚴復の『天演論』のほか、梁啓超はもう一つの進化論を受容した。それはすなわち日本経由の進化論である。変法失敗で渡日した後、彼は「和文漢読法」を自ら編み、「東京に住んでから一年間経ち、少し日本語が読めるようになったことで、思想が一変した」⁽⁴⁷⁾。彼は、日本人の翻訳や著述のなかから得た知識を貪欲に吸収する一方、急速に「国家」・「国民」・「進化」などの新しい概念を自己の思想の枠組みのなかに採り入れ、精力的に西洋思想の紹介などに取り組んだ⁽⁴⁸⁾。様々な西洋思想のうち、彼の多彩な言論活動の理論的基軸となったのはほかでもなく、進化論である。ただそれは、日本という媒介が介在し日本人のフィルターを通して濾過された進化論である。しかも、その受容には、救国という課題に応える要素を見出そうとした彼自身の問題意識が強く働き、取捨選択がなされたのである。

進化論の日本への導入は、草創期の東京大学、とりわけ明治前半期のお雇い外国人と深く関わっている。1877年に来日したモース (Edward S. Morse 1838-1925) は、最初にダーウィンの生物進化論を日本に紹介した⁽⁴⁹⁾。そして、スペンサー哲学の強烈な洗礼を受けたフェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa 1853-1908) は、モースの推薦を受けて翌年来日し、講義の中で「世態開進論」という言葉を使って、社会進化論を日本の学界に採り入れた⁽⁵⁰⁾。さらに、進化論の導入が最も劇的な思想的事件と



加藤弘之（1836-1916）

結びついた例は、1882年『人権新説』をもって、天賦人権論から社会進化論へと立場を大きく転換させた加藤弘之（1836-1916）の場合であろう⁽⁵¹⁾。進化論の面で、梁啓超に最も大きな影響を与えたのが、彼の主宰する『清議報』にしばしば登場した加藤弘之なのである⁽⁵²⁾。

早い段階で「天賦人権説」に共鳴した加藤は、後に、進化論の立場から「天賦人権説」を否定し、以前の著書『真政大意』（1870年）と『国体新論』（1875年）の絶版を宣言し、『人権新論』（1882年）を刊行した。こういった思想的「転向」は、大きな反響を呼び、矢野文雄（1851-1931）や植木枝盛（1857-1892）、馬場辰猪（1850-1888）などから強烈な批判を受けた⁽⁵³⁾。

梁啓超が読んだと確定できる加藤の論著として、『強者の権利の競争』（1893年）、『天則百話』（1899年）、『道德法律進化の理』（1900年）などが挙げられる⁽⁵⁴⁾。『強者の権利の競争』は、後に「物競論」と題して中国語に訳されたが、それに先立って、梁啓超は「論強権」という論説を発表し、その内容を要約解説した⁽⁵⁵⁾。この論説は、次のように書き出された。

強権とは、強者の権利という意味である。英語でいう THE RIGHT OF THE STRONGEST である。この言葉は未だ東方で出現しておらず、加藤〔弘之〕氏は今の名に訳したのである。強者の権利とは何か。すなわち弱者に対する強者の施行した権力である。わが人間界から一切の生物世界、ないし無機物世界にいたるまで、みなこの強権が施行されている。故に一言で言えば、天下にはいわゆる権利なるものは存在せず、ただ権力があるのみであり、権力即権利である。⁽⁵⁶⁾

つまり、ここで言う「強権」は、「強者の権利」という加藤の訳語を縮めたものであり、梁啓超自身の造語である。すべてを権力の力関係に還元するこの図式は、亡命直後の梁啓超からみれば、極めて単純明快に国際現状の厳しさを表している。彼は、国際競争の場で厳しい立場に立たされた中国を奮発させるための理論的根拠を見つけ、「強権」を後の議論のキーワードとして愛用した⁽⁵⁷⁾。

梁啓超による加藤弘之への言及は、その後の彼の論説にも見られる。例えば、「十種徳性相反相成義」における「利己与愛他」という節において、加藤の名は、直接に挙げられていないが、利己と利他との関係性の叙述は、明らかに『道德法律進化の理』における加藤の見方の紹介である⁽⁵⁸⁾。「うまく利己を実現できるものは、必ず先に群を利し、後に自分の利益もまたそれにしたがって達成する」のであり、「真に自分を愛することのできるものは、その心を推して家や国を愛し、その心を推して家人や国民を愛する。そこで他を愛する義が生じる。凡そ他を愛する所以もまた我の為のみである」という⁽⁵⁹⁾。すなわち、利他はあくまでも利己の一手段に過ぎず、利己を貫徹させることによって利他につながり、ひいては「群」を利することができる、いわば利己にスタンスを置く功利主義的な論である。それから二年後、加藤の『天則百話』の部分訳が梁啓超によって『新民叢報』に掲載されている⁽⁶⁰⁾。その翻訳の冒頭に付された紹介文から、加藤弘之に対する梁啓超のまとまった認識を知ることができる。梁啓超は「日本文学博士加藤弘之は、ドイツ学派の大家である」とし、「私は夙にその本を愛読した」と告白する⁽⁶¹⁾。また、日本学界の諸先輩のなかで、加藤ほど毀誉を激しく受けた人はいないとも評する⁽⁶²⁾。しかし、「論強権」の時とは異なり、加藤弘之の学説が中国に紹介されることについて、梁啓超は、必ずしも無条件に歓迎しているとは限らず、躊躇を見せた。彼は次のように述べ、利己心を貫く加藤説の中国での「誤読」を危惧する。

専ら進化論を主とし、愛己心をもって道德法律の標準にしている。その言の多くはもとより過激であり弊害もあるが、主張に根拠があり、言うことは理にかなっている。ゆえにその日本の学界に及ぼした影響がはなはだ大きい。私はつとに彼の本を愛読した。ゆえに彼の学術を中国に紹介しようとしなかったのは、その益するところがその損するところを償うに足りないと懸念したからである。⁽⁶³⁾

さらに、この論説の最後に、梁啓超は自らの見解を付した。

公平に論じれば、いわゆる愛他心とは、人群〔社会〕が成立する根本である。毎日手入れをしても増殖しないのを心配するものであって、どうしてそれを抹殺して利己心の付属品にしてしまうのか。この説を唱えることは、人類が私利私欲を知らないことを恐れ、また猿に木登り技術を教えようとするものと異ならない。ゆえにこれらの学理を今日の中国で実行することは、もっとも不適切である。とはいえ、加藤氏の意図もまたここにあるのである。彼は今日の人類は利他の行為においては気安く行なうことができないのを見たがゆえに、気持ちに逆らってそれを制約するよりも、気持ちに沿って導いたほうがよいと考えた。己を利そうとするなら、先に他を利さなくてはならないという義を大いに発明し、あなたたちの言っている利は真の利ではない、もし真に私利を求めるなら、私利以外にそれを求めるように、と。これが、加藤氏が国中の非難を蒙ることになってもその説を堅持し、少しも変えなかったゆえんである。⁽⁶⁴⁾

このように、利他心を社会の根本と見なす梁啓超は、利他を通じて利己を達成するという加藤の主張に対して、全面的には賛成できなかった⁽⁶⁵⁾。なぜなら、「バラバラの砂」とされる中国の現状に照らしてみれば、過度な利己心の強調によって私利私欲の追求が助長されるという結果が危惧されるからである⁽⁶⁶⁾。しかし、一方で、利己を強調した加藤の意図に対する梁啓超の推測はあたっている。実際、加藤の主な関心は、集団内部における個々人の生存競争およびそれによる社会の進化というよりも、むしろ集団と集団との間の生存競争によるそれにあつた。つまり、国家のためであることは自分のためでもあることが説かれ、利他が利己とつながるようになる。このような特質を持つ加藤の理論は、富国強兵をスローガンとし、国家の独立と対外的安全を最重要の課題とする明治国家における国民の動員に、まさに適合的なものであろう。

時期ごとに考え方にゆれがあつたにせよ、「個」―「群」あるいは「私」―「公」の関係は、一貫して梁啓超の関心事である。早くから「群」に関心を示した彼は、自らの改革論を実現するために、「《説群》序」(1897年)に始まり、「十種徳性相反相成義」(1900年)、「中国積弱溯源論」(1901年)、「新民説」(1902-06年)、「論小説与群治之関係」(1902年)、「論仏教与群治之関係」(1902年)など、多くの紙幅をさいて「群」に言及し、「群学」を積極的に鼓吹している。これらの論説では、進化論の視点から、中国人における国家思想のなさを批判し、「個」ではなく、「群」・「合群」を強調する表現が目立つ。例えば、「物競天沢の公理をもってはかつてみれば、合群の力が堅くて大きいものほど、世界において優勝権を占められる。これは哲理を少しだけ学んだ人にもわかることである」⁽⁶⁷⁾と言い、「自由というものは、団体の自由であり、個人の自由ではない」⁽⁶⁸⁾という。そして、彼は、「歴史は人群進化の現象を叙述するものである」とし、一人の人間として見れば、現代の人は必ずしも古代の人に勝るとは限らないが、進化は個人のものではないため、必ず「人群」に求めなければならないという。したがって、進化の歴史をもって愛国心を激発し、「合群」の力をあわせて、今日の時勢に適応しなければならないと強調する⁽⁶⁹⁾。また、独立を論じる際も、「独立」と「群」は必ずしも矛盾していないと強調し、次の

ように述べている。

群は、天下の公理である。競争の世界に位置し、群の大きくて固いものこそ、優勝し生存に適合できる。中国人は久しくバラバラの砂だと外国人にからかわれている。いま次々と独立を言ったりするのでは、群が散漫になるのではないか。曰く、独立とは、衆を合して独立してその群を強くさせることを言い、一群を破って分裂させて独立することを言うのではあらず、人々が互いに頼らないことを言い、互いに協力しないことを言うのではない。⁽⁷⁰⁾

ここで、梁啓超が注目しているのは、個人よりも「群」、一国内の競争（「内競」⁽⁷¹⁾）よりも国際間の競争（「外競」⁽⁷²⁾）なのである。しかも、ブルンチュリ（Johann Kaspar Bluntschli 1808-1881）の受容を通じ、梁啓超は、その社会有機体観がドイツ国家学の国家有機体観によって補強され、中国を強くしなければならないとの認識を深め、進化論を道具にして「国民」の創出および「国家」の形成といった中国の直面する課題に取り組んだ⁽⁷³⁾。さらに、「群」の重視は、宗教の社会的機能を重視する進化論者キッド（Benjamin Kidd 1858-1916）について彼が書いた評伝からも読み取れる⁽⁷⁴⁾。評伝のなかで、梁啓超は、キッドを「進化論の大後継者であり、また進化論の革命健児でもある」とし、その著作の『泰西文明原理』（1902年）について、「新しい境地を開き、卓然と一家言をなし、世界社会全体に影響を与え、将来のために一大光明を放つもの」と絶賛している⁽⁷⁵⁾。しかし、この文章で梁啓超が主に紹介しようとしたのは、その前に出版された『人群進化論』（1894年）なのである⁽⁷⁶⁾。彼によると、スペンサーの論では解決できなかった「人類の将来の進化はいかにして行なうべきなのか、どこを落ち着き先とするのか」という問題について、キッドは『人群進化論』をもって解決したという。キッドは、競争の優者と適者についてなされたダーウィンの現在主義・個人主義的な解釈を正し、個人の利益を追求する「現在の利己心」、いわば人類の天性は、人性のなかで最も「個人的」・「非社会的」・「非進化的」であり、人類全体の永続的進歩には無益で有害であると非難し、活気に満ちた有機体の進化は、「個人を犠牲にして社会（すなわち人群）を利さなければならない、現在を犠牲にして未来を利さなければならない」という⁽⁷⁷⁾。個人利益を追求する天性を抑制し、社会の進化を促進するために、ここでキッドは宗教の役割と死の意義を強調する。死に対するキッドの認識について、梁啓超は次のようにまとめている。

短命であれば、交代のことがしばしば起こり、その習慣や状態や性質などの変化も甚だしく速く、時代に適して自存できる。そうでなければ、長寿をもって旧態を保持し、変化が甚だしく緩く、外界の変遷を追いかけることはできず、その競争も必ず敗北し、日に滅亡に帰する。物が生を有する所以は、その目的は必ず自身にあらず、その大きな目的（すなわち未来の全体）を達するための過渡に過ぎない。その死を有するゆえんは、またこの大きな目的を達成するための一要具であり、故に死は進化の動力なのである。⁽⁷⁸⁾

つまり、生も死も単なる自身の利益のために存在するのではなく、所属する集団の進化、その未来の生存のためにあるのである。いままでの死に関する議論と異なり、死と社会進化とを関連づけ、科学的に現世の観点から死の意義を探究する集団主義・未来主義の姿勢を、梁啓超は高く評価し、それゆえにキッドを「進化論革命巨人」だと見なしている⁽⁷⁹⁾。

1902年頃は、梁啓超の一生においても、「破壊」を提唱し、「革命」に近づき、国家主義を鼓吹する最も急進的な時期であったことを想起すれば、キッドの集団主義的・功利主義的な死亡観の影響も無視できないであろう⁽⁸⁰⁾。換言すれば、集団維持のための自己犠牲をいとわない個人が多いほど集団間の

生き残りに勝ちうる優れた集団であるとするキッドの思想は、彼に格好の理論的根拠を提供した。なぜなら、民族・国家の将来を課題として担っている梁啓超にとって、生死の問題は、決して個人探求の次元にとどまらず、「利他」の精神を持つ「国民」の創出、国家的・社会的結束の強化の問題でもあるからである。国民国家の形成にあたって、彼が大いに期待しているのは、流血の犠牲をも辞さない無私の精神および死の未来への効果なのである。この点は、尚武の精神、「日本魂」である武士道を賞賛する彼の一連の論説からも看取できる⁽⁸¹⁾。

要するに、梁啓超にとって、進化論は科学的で普遍的な法則にはかならないため、当然それを中国の直面する問題にも適用できると考えた。名高い「新民説」の第四節の題名「就優勝劣敗之理，以証新民之結果，而論及取法之所宜」に象徴されるように、「優勝劣敗の理」がこの時期の彼の言論活動の軸となり、進化論が彼にとって与えられた改革提唱の最高の道具となり、立論の思想的拠り所となったのである。当時中国が置かれた国際環境は間違いなく「優勝劣敗」の生存競争の場であるため、競争に勝ち抜くために各方面において根本的な改革を行なわなければならない、というのが彼の現状認識である。そして、遡ってみれば、中国は早い段階ですでに西洋に立ち遅れていたのか、それとも西洋の進歩はまだ日の浅いものなのか、さらに、現在明らかに「劣勢」にある中国は「優勢」の西洋に追いつく可能性がまだ残されているのか。これらの問題に答えるために、梁啓超は進化論を中国史に適用し、世界史のなかの中国を見定めようと試みたのである。

(以下次号)

注

- (1) 陳勝（?- B.C.209）、秦代末期の反乱指導者。字は渉。劉邦や項羽に先んじて秦に対する反乱を起こしたが、秦の討伐軍に攻められて敗死した。彼が呉広（?- B.C.208）とともに起こした中国史上初の農民反乱は失敗に終わったが、反乱の先駆けとなった二人の功績にちなんで、後世、物事の先駆けを表す言葉として「陳勝呉広」を使っている。
- (2) 「清代學術概論」『梁啓超全集』5、3101頁（梁啓超著・小野和子訳注『清代學術概論——中国のルネッサンス』（東洋文庫245）、平凡社、1974年、284頁）。
- (3) 梁啓超研究の代表的な著作として、Joseph R. Levenson, *Liang Ch'i-ch'ao and the Mind of Modern China*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1953.（約瑟夫・阿・勒文森著、劉偉・劉麗・姜鉄軍訳『梁啓超与中国近代思想』四川人民出版社、1986年）、張朋園『梁啓超与清季革命』（台北：中央研究院近代史研究所、1964年）、狭間直樹編『共同研究 梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』（みすず書房、1999年）、夏曉紅『覺世与伝世——梁啓超の文学道路』（上海人民出版社、1991年）、鄭匡民『梁啓超啓蒙思想的東学背景』（上海書店出版社、2003年）、董德福『梁啓超与胡適——兩代知識分子学思歷程的比較研究』（吉林人民出版社、2004年）などが挙げられる。
- (4) 一口に進化論というが、ダーウィンの生物進化論、生物の進化と類比することで社会の変化や推移を説明するスペンサーの社会進化論、さらにこれらの学説を継承する、あるいは逆に批判するものが、さまざまに入り混じって存在する。鈴木貞美「明治日本における進化論受容——その問題群の構成をめぐって」（伊東俊太郎編『日本の科学と文明——縄文から現代まで』同成社、2000年）を参照。しかし、日本と中国で大きな反響を呼んだのは、主として、社会進化論であった。以下、煩雑を避けるため、本文における「進化論」という言葉は、特に断りがなければ、もっぱら社会進化論のことを指している。
- (5) 「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」『新民叢報』3、1902年3月10日（『飲冰室文集点校』1、402頁）。

- (6) 三宅雪嶺『明治思想小史』丙午出版社、1913年（『近代日本思想大系5 三宅雪嶺集』筑摩書房、1975年、239頁）。
- (7) 末広重恭『二十三年未来記』博文堂、1886年、86-87頁。下線は原文。
- (8) 胡適著・吉川幸次郎訳『胡適自伝』養徳社、1946年、87-88頁。
- (9) 中国における進化論については、伊藤秀一は時期的に、「進化論を受容した時期（1873-1898）」、「進化論を信奉した時期（1898-1905）」、「進化論の克服がはかられた時期（1905-1919）」の三つに分けている（伊藤秀一「進化論と中国の近代思想（一）」『歴史評論』123、1960年、34頁）。
- (10) 中国における進化論の受容の状況については、小野川秀美「清末の思想と進化論」（『清末政治思想研究』京都：東洋史研究会、1960年；増補版、みすず書房、1969年）に詳しい。そして、嚴復の訳文『天演論』とハックスレーの原文をめぐる検討については、Schwartz, Benjamin Isadore, *In Search of Wealth and Power: Yan Fu and the West*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1964. (B.I. シュウォルツ著・平野健一郎訳『中国の近代化と知識人：嚴復と西洋』東京大学出版会、1978年。)((美) 史華茲著・葉鳳美訳『尋求富強：嚴復と西方』江蘇人民出版社、1989年。)がある。また、進化論をめぐる日中両国間の「思想連鎖」に着目した実証的な研究として、川尻文彦「「進化」と加藤弘之、嚴復、梁啓超——「進化」をめぐる近代日本、中国間の「概念」連鎖」（鈴木貞美・劉建輝編『東アジアにおける知的システムの近代的再編をめぐる』京都：国際日本文化研究センター、2008年）が挙げられる。
- (11) 「天演論・吳汝綸序」王栻編『嚴復集』5、中華書局、1986年、1319頁。
- (12) 前掲『胡適自伝』、89頁。なお、梁啓超自身も後年の『清代學術概論』のなかで、当時行なった言論の影響の有様を次のように述べている。「梁啓超は、以前から桐城派の古文を好まず、幼年時代、文章をつくるには、漢末・魏・晋のものを学んで、すこぶる技巧をたっとんだ。しかしこのときになってみずから解放されて、つとめて平易濶達なる文章をかき、ときには俗語や韻語、さらには外国語をもまじえ、自由に筆をふるって、およそ束縛されることがなかった。学生たちは争ってそれをまね、新文体と称した。老輩たちはこれをいたく嘆き、野狐（野狐禪すなわち邪道）と誹謗したが、しかしその文章は、論理明晰であり、筆鋒はつねに情感にあふれて、読者にとって、一種ふしぎな魅力をもたえていた。」（梁啓超著・小野和子訳注『清代學術概論——中国のルネッサンス』（東洋文庫245）、平凡社、1974年、271-272頁）。嚴復と梁啓超との文体の相違は、二人の姿勢の相違に由来するであろう。嚴復は、民衆よりもエリートの士大夫の意識改革を優先させて考え、西洋の観念を表現するために、あえて伝統的語彙を駆使し格調高い古典中国語を使用するのに対し、梁啓超は、一般民衆の知識水準の向上なしには国全体の競争力の増強もないということを強く感じ取り、日本経由の訳語などを導入し、意識的に平易な中国語を使用する。嚴復が文章で使った「天演」・「物競」・「天択」は、梁啓超の文章で「進化」・「生存競争」・「淘汰」と表現されたのであり、後者のほうが社会一般に受け入れられた。
- (13) ドイツ観念論の哲学的影響を受け、進化論を自然哲学と考える魯迅の進化論認識については、高晃公『魯迅の政治思想——西洋政治哲学の東漸と中国知識人』（日本経済評論社、2007年）の第三章「魯迅の進化論と退化論」に詳しい。
- (14) 魯迅「人の歴史」『河南』第1号、1907年12月（伊藤虎丸ほか訳『魯迅全集』1、学習研究社、1984年、19頁）。
- (15) 『天演論』が翻訳される前、『談天』（1859年）、『地学浅釈』（1873年）のような天体・地質など近代自然科学関連の本がすでに中国に紹介された。康有為の『桂学問答』（1894年）のなかに、この二冊の訳書の名が挙げられ、梁啓超の「読書分月課程」（1894年）において、この二冊が六ヶ月目の読書リストに挙げられ、また同じ梁啓超の「西学書目表」・「読西学書法」にも、この二冊について

「不可不急読」（「西学書目表」時務報館，1896 年。「読西学書法」時務報館，1896 年。『《飲冰室合集》集外文』（下），1125-1126 頁，1161 頁）と指摘する。そして、「進化」という言葉が使われていなくても、『天演論』に先だって，進化論的な思考がすでに存在し，それに近い思想を持つ知識人が現われた。その思考は外来思想ではなかったし，また伝統思想とも異質のものである。鄭観応（1842-1922）や王韜（1828-1897）など「条約港知識人」（条約港や香港で中国の伝統文化と欧米宣教師がもたらした西洋文化の摩擦の狭間で育った新しいタイプの知識人）はその代表であった。進化論の影響で中国人の考えが一変したというよりも，当時人々の抱いた疑問などに対し，それが明白かつ包括的な説明を与えたが故に，進化論は急速かつ熱狂的に受け入れられたのである。その意味で，進化論はいわば最後の一押しだと言える。佐藤慎一「『天演論』以前の進化論——清末知識人の歴史意識をめぐって」（『思想』792，1990），呉丕『進化論与中国激進主義 1859-1924』（北京大学出版社，2005 年）の第二章「進化論在中国的早期伝播」および附録「中国進化思想発展大事記」を参照。

(16) 佐藤慎一「梁啓超と社会進化論」『法学』（東北大学）59-6，1996 年，166-167 頁。なお，受容の順番としては，康有為の「三世進化説」との出会いが先で，嚴復の翻訳した『天演論』との出会いが後になるが，叙述上の便宜をはかるため，以下，まず『天演論』の受容，そして「三世進化説」の受容を分析していく。

(17) 「与嚴幼陵先生書」1897 年。王栻の推断によると，この書簡は 1897 年 3 月（光緒二十三年二月）に書かれたという（王栻編『嚴復集』5，中華書局，1986 年，1566 頁）。1896 年，上海で『時務報』の主筆を務める梁啓超は，每晚，馬建忠（1845-1900）宅でラテン語を習っていたが，そこで嚴復と知り合い，当時訳稿が成ったばかりの『天演論』を見せてもらったという。光緒二十三年（1897 年）3 月 3 日康有為宛の書簡のなかで，梁啓超は次のように述べている。「嚴幼陵から手紙が来しました。その批評は非常に的を射たものでしたが，すべて超が先刻承知していることです。しかし，この人の学問はじつに精密深遠であり，手紙の言葉の中には，超の脳髓を刺激するものがありました。先生にお尋ねしたいのは山々ですが，話があまりに長くなるので，今夜は存分に申し上げることができません。次回，引き続き述べさせていただきます。」（丁文江・趙豊田編，島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』1，岩波書店，2004 年，142-143 頁）。晩年の嚴復もこの書簡に言及したことがある。1916 年 9 月 22 日の熊純如宛の書簡に，「任公筆墨，原自暢達，其自甲午以後於報章文字，成績為多，一紙風行海内，觀聽為之一聳。又其時赴東学子，盈萬累千，名為求学，大抵皆為日本所利用。当上海《時務報》之初出也，復嘗寓書戒之，勸其無易由言，致成他日之悔。聞当日得書，頗為意動，而輒念乃云：“吾將凭隨時之良知行之。”由是所言，皆偏宕之談，驚奇可喜之論，至學識稍增，自知過當，則曰：“吾不惜與自己前發言宣戰。”然而革命，暗殺，破壞諸主張，並不為悔艾者留餘地也。」（『嚴幾道晚年思想（即嚴幾道与熊純如書札節録）』香港：崇文書店，1974 年，59 頁。句読点は筆者）という。嚴復は天津『直報』に前後して載せた「論世變之亟」「原強」「救亡決論」「辟韓」などにおいて，進化論を理論的根拠として，直面する危機的狀況を述べ，「鼓民力，開民智，新民德」の救国策を立てている。また，梁啓超と嚴復に関しては，次のような回想が残されている。「梁氏在上海辦《時務報》時，常与馬相伯，馬眉叔兄弟往還，二人均多學法國最早，學問亦博，其於西人政學，得之於馬氏兄弟者甚多。嚴亦常通問，故見聞極廣。辦《新民叢報》時，与黃公度通書極多：報中所載水蒼雁紅館來書，即公度手筆。又嚴訳《天演論》，為梁氏潤飾者十之有七，乃居京師時事，知者殊鮮。此為梁氏居《新民叢報》時，親告筆者，惜忘其時日矣。」（超觀「記梁任公先生軼事」『民主中国』2-1，1959 年 1 月。夏曉紅編『追憶梁啓超』中国廣播電視出版社，1997 年所収，51 頁）。なお，1899 年初めて中国を訪れた内藤湖南は，天津・北京・上海で嚴復ら諸名士と筆談を行なった。嚴復との筆談の内容は旅行記の『燕山楚水』（博文館，1900 年）に簡単に記されている。旅行記のなかで，湖南は「嚴復は年齒四十七，二十年前日本に遊びしことあり，十年前英國に遊學すること三年，英語を能くし，已にハックスリーの書を訳

して天演論と名け、印行したる者あり、眉目の間英爽の気あり、政変以来、人々口を鉗する間に在りて、往々談論縦横、忌諱を憚らざるあり、蓋し此地方第一流の人物なるべし」（『燕山楚水』『内藤湖南全集』2, 30 頁）と記している。そして、「大著天演論、方先生〔方若、字は藥雨、『国聞報』の記者〕の惠贈を蒙り、奉読するに文字雄偉、翻訳に似ず、真に大手筆を見る」（同上、33 頁）と筆談のなかで嚴復に伝えた。

(18) 「与嚴幼陵先生書」『飲冰室文集点校』1, 179 頁。

(19) 「与嚴幼陵先生書」は、梁啓超が自分の書いた「古議院考」（『時務報』10, 1896 年 11 月 5 日）に対する嚴復の批判に書簡で答えたものである。「古議院考」は、議院制度を西洋の富強の所以とするとともに、議院の精神は古代中国にもあったとして、西洋の議院制の導入を合理化しようとするものであった。嚴復は批判の矛先を主に「言西政、必推本於古、以求其從同之跡」（『古議院考』『飲冰室文集点校』1, 2 頁）というような「附会説」に向けていた。

(20) 「与嚴幼陵先生書」『飲冰室文集点校』1, 178 頁。

(21) 「『説群』序」『知新報』18, 1897 年 5 月 17 日（『飲冰室文集点校』1, 128 頁）。

(22) ここで、梁啓超は「三世進化説」をもって嚴復の説を反駁したが、『天演論』における嚴復自身の唱えた進化論を論駁の根拠にすればより有力になるはずであろう。また、梁啓超は嚴復の文章の難解さについて苦言を呈したことがあり、よりわかりやすい言葉で翻訳してほしいと嚴復に提言したようである（周振甫『嚴復思想述評』台北：台湾中華書局、1964 年、201 頁、302 頁）。こうしてみれば、おそらくその時点において、梁啓超は、必ずしも進化論の中身をよく理解したとは限らず、それを活用できる段階にはまだ達していなかったと推測できる。

(23) 梁啓超は地層の順序になぞらえて、「地学家言土中層累、皆有一定、不聞花剛岩之下有物跡層、不聞飛鼉大鳥世界以前復有人類。」（『与嚴幼陵先生書』『飲冰室文集点校』1, 178 頁）と説明している。

(24) 「与嚴幼陵先生書」『飲冰室文集点校』1, 178 頁。

(25) 同上、178 頁。

(26) 同上、178 頁。

(27) 同上、179 頁。「民度」を考慮し当面の目標と最終目標を分けて設定することがよくある。例えば、スペンサーは金子堅太郎宛の手紙のなかで、九年前に明治政府の政治方針について諮問した森有礼（1847-89）に対する彼の答えの内容を記している。1892 年 8 月 12 日の手紙において、「多分御記憶のことと思ふが、日本の公使の森氏が小生に日本憲法の草案を見せた時に、小生は、これまで専制に馴らされてゐた日本が、俄かに立憲政体になることは不可能だと、極めて保守的の答を與へたことをお話した。然るに私の忠告は、適当に考慮されなかつた。さうして日本の時事に関する近頃の報道によると、貴国は今や、餘りに大きい自由を與へ過ぎた弊害を経験させられてゐる」（長谷川如是閑「附録 スペンサーの日本観」『スペンサー』岩波書店、1939 年、203 頁）と述べ、日本の民度の低さを理由に、絶対君主政を表明している。

(28) 梁啓超は、「今文学運動之中心、曰南海康有為。」（『清代學術概論』『梁啓超全集』5, 3097 頁）とし、「對於“今文学派”為猛烈的宣傳運動者、則新会梁啓超也。」（同上、3099 頁）という。

(29) 最初康有為に会ったとき、その話を聞いた梁啓超は、「冷水澆背、當頭一棒、一旦尽失其故垒、惘惘然不知所從事；且驚且喜、且怨且艾、且疑且惧」（『三十自述』『飲冰室文集点校』4, 2223 頁）と自ら回心的体験を記している。

(30) 「土着」とは、佐藤慎一が前掲論文「梁啓超と社会進化論」において用いた言葉である。康有為の「三世進化説」は、社会一般を持続的かつ不可逆的に「進化」するものと捉える点で、広い意味の社会進化論に属すると見なすことができる。しかも、この説は康有為自身の着想によるものであり、その意味では、中国人が「外来」の社会進化論の影響を受ける以前に形成された「土着」の社会進化論

にはかならないという。一方で、康有為の「三世進化説」は訳書の『地学浅釈』から影響を受けたという見方もある（伊藤秀一「進化論と中国の近代思想（一）」『歴史評論』123, 1960年, 34-37頁を参照）。しかし、西洋の自然科学の訳書からの影響があっても、それは決定的な意味を持つとはいえず、むしろもともと康有為にあった思想を体系化させる触媒という役割を果たしたと見なしたほうが妥当であろう。梁啓超が「三世進化説」を活用して書いた著作には、「変法通議」（1896-99年）、「与嚴幼陵先生書」（1897年）、「《説群》序」（1897年）、「論君政民政相嬗之理」（1897年）、「読春秋界説」（1898年）、「読孟子界説」（1898年）、「自由書」（1899-1901年）などがある。

- (31) 「変法通議・学校総論」『時務報』5, 6, 1896年9月17日, 27日（『飲冰室文集点校』1, 26頁）。
- (32) 「変法通議・論科举」『時務報』7, 8, 1896年10月7日, 17日（『飲冰室文集点校』1, 32頁）。
- (33) 「《新学偽経考》叙」『知新報』1897年9月26日（『梁啓超全集』1, 136頁）。
- (34) 「論君政民政相嬗之理」『時務報』41, 1897年10月6日（『飲冰室文集点校』1, 86頁）。
- (35) 同上, 84頁。
- (36) 同上, 86頁。
- (37) 同上, 86頁。
- (38) 「読春秋界説」『清議報』6, 8, 1899年2月, 3月（『梁啓超全集』1, 157頁）。「三世進化論」における循環論の名残りと関連して、梁啓超に次のような指摘がある。「夫競争者、文明之母也。競争一日停、則文明之進歩立止。由一人之競争而為一家、由一家而為一郷族、由一郷族而為一国。一国者、团体之最大圈、而競争之最高潮也。若曰並国界而破之、無論其事之不可成、即成矣、而競争絶、母乃文明亦与之俱絶乎？況人之性非能終無競争者者也。然則大同以後、不轉瞬而必復以他事起競争於天国中、而彼時則已返為部民之競争、而非復国民之競争、是率天下人而復歸於野蛮也。（中略）国也者、私愛之本位、而博愛之極点、不及焉者野蛮也、過焉者亦野蛮也。」（『新民說・論国家思想』『新民叢報』4, 1902年3月24日。『飲冰室文集点校』1, 557-558頁）という。そして、康有為と梁啓超との差異は、それぞれの実践にも反映されている。すなわち、辛亥革命後の康有為は「復辟」を望んだのに対し、梁啓超は時代とともに前に進んだのである。その差異について、梁啓超は次のように述べている。「梁啓超と康有為とがまったく異なる点は、康有為はあまりにも定見をもち、梁啓超はあまりにも定見をもたないということである。行動においてもそうであり、研究においてもそうであった。康有為はつねに、「わたくしの学問は、三十歳ですでに完成された。そのご進歩はなく、また進歩を求める必要もない」と言っている。梁啓超はそうではない。つねに学問が未完成であることを自覚し、かつ完成しないのを憂え、数十年間毎日毎日彷徨摸索しつづけてきた。ゆえに、康有為の学問についてはここに結論を出すことができるけれども、梁啓超の学問については結論を出すことができないのである。」（前掲『清代學術概論——中国のルネッサンス』, 285頁）。
- (39) 「与嚴幼陵先生書」からして、康有為の「大同」という最終目標が『天演論』とやや異なっていることに、梁啓超も気付いていたことがわかる。「三世進化説」と社会進化論との具体的相違について、佐藤慎一「文明と万国公法」（祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』創文社, 1977年。後に佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会, 1996年所収, 122-133頁）を参照。
- (40) 「論支那宗教改革」『清議報』19, 20, 1899年6月28日, 7月8日（『飲冰室文集点校』3, 1336頁）。
- (41) 同上, 1336頁。
- (42) 前掲『清代學術概論——中国のルネッサンス』, 278頁。
- (43) 「保教非所以尊孔論」『新民叢報』2, 1902年2月22日（『飲冰室文集点校』3, 1343頁）。なお、梁啓超の孔子認識について、高柳信夫「梁啓超の「孔子」像とその意味」（同編著『中国における「近代知」の形成』東方書店, 2007年）を参照。
- (44) 「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」『飲冰室文集点校』1, 399頁, 402頁。なお、『新民叢報』第

- 六号（1902年4月）に達爾文（ダーウィン）、赫胥黎（ハックスレー）、斯賓塞（スペンサー）の肖像画が併せて掲載されている。梁啓超が書いた進化論者の評伝は「天演学始祖達爾文之学説」のほか、「進化論革命者頡德〔キッド〕之学説」（『新民叢報』18, 1902年10月16日）がある。
- (45) 「論學術之勢力左右世界」『新民叢報』1, 1902年2月8日。梁啓超はコペルニクス、ベーコン、デカルト、モンテスキュー、ルソー、フランクリン、アダム・スミス、ブルンチュリ、ダーウィンの名前を挙げている。
- (46) 「論學術之勢力左右世界」『飲冰室文集点校』1, 287頁。
- (47) 「三十自述」『飲冰室文集点校』4, 2224頁。
- (48) 梁啓超の一連の西洋思想家論が、さまざまなテキストが幾重もの翻訳を経て彼の「読解」へと受け継がれていく過程の所産として成立したことについて、宮村治雄「梁啓超の西洋思想家論——その「東学」との関連において」（『中国——社会と文化』5, 1990年。後に宮村治雄『開国経験の思想史——兆民と時代精神』東京大学出版会, 1996年所収）を参照。
- (49) 「1877年10月6日、土曜日。今夜私は大学の大広間で、進化論に関する三講の第一講をやった。教授数名、彼等の夫人、並に五百人乃至六百人の学生が来て、殆ど全部がノートをとっていた。これは実に興味があると共に、張合のある光景だった。（中略）聴衆は極めて興味を持ったらしく思われ、そして、米国でよくあったような、宗教的の偏見に衝突することなしに、ダーウィンの理論を説明するのは、誠に愉快だった。講演を終った瞬間に、素晴らしい、神経質な拍手が起り、私は頬の熱するのを覚えた。日本人の教授の一人が私に、これが日本に於るダーウィン説或は進化論の、最初の講義だといった。」（E.S. モース著・石川欣一訳『日本その日その日』2（東洋文庫172）、平凡社、58頁）。
- (50) スペンサーの思想が明治期の日本に受容された過程およびその影響について、山下重一の『スペンサーと日本近代』（御茶の水書房、1983年）が最も包括的な研究である。著者は主に、「スペンサー受容の主要な水路であったと考えられる自由民権陣営、東京大学におけるスペンサー社会学の導入および明治政府の要人、特に森有礼と金子堅太郎の二人の三方面について、具体的にそれぞれの受容の特色を検討すると共に、それぞれの受容形態とスペンサー自身の思想の諸側面との間の対応関係を考察」（同上、10頁）している。フェノロサについて、「而して実に氏を推薦せるものは、当時動物学者として名を知られたるエドワード・エス・モース氏なりき。」（「元大学教授フェノロサ氏逝く」『哲学雑誌』260号、1908年12月、1119頁）という。フェノロサ「世態開進論」『学芸志林』（東京大学文学部機関誌）第36、37、39号、1880年。
- (51) 加藤弘之における進化論の受容およびその思想の変化について、松本三之介「加藤弘之の転向」（『近代日本の政治と人間——その思想史的考察』創文社、1966年）、許介麟「日本と中国における初期立憲思想の比較研究——とくに加藤弘之と康有為の政治思想の比較を中心にして」（一）（二）（三）（四）（五）（『国家学会雑誌』83-5・6、7・8、9・10、11・12、84-1・2、1970年、1971年）、李曉東『近代中国の立憲構想——嚴復・楊度・梁啓超と明治啓蒙思想』（法政大学出版社、2005年）の第五章「明治啓蒙思想と立憲政治——加藤弘之の場合」を参照。日本における進化論の受容について、三宅雪嶺『明治思想小史』（丙午出版社、1913年）、松本三之介「近代日本における社会進化思想（一）（二）（三）」（『駿河台法学』7-1、1993年10月；11-2、1998年3月；16-1、2002年10月）、源了圓「徳富蘇峰と有賀長雄におけるスペンサーの社会思想の受容（上）」（『日本文化研究所研究報告』14、東北大学日本文化研究所、1978年。しかし、実際に書かれたのは徳富蘇峰についてのみである）を参照。
- (52) 例えば、加藤弘之の論を翻訳して、「人群進化論」（『清議報』37、1900年2月1日）、「十九世紀思想変遷論」（『清議報』52、1900年7月1日）として掲載した。そして、二、三ヶ月後に出版される書籍の予告「広智書局已訳待印書目」（『清議報』100、1901年12月31日）に、加藤弘之の『人権新説』が入っている。なお、有賀長雄も、『清議報』によく登場した日本人である。例えば、有賀長

雄の論を翻訳して、「第十九世紀外交一覧」(『清議報』39-41, 1900年2-3月),「社会進化論」(『清議報』47-48, 51-52, 55-57, 61-63, 70, 1900年5-9月, 1901年正月),「英杜戦争後之形勢」(『清議報』48, 1900年5月21日)として掲載した。有賀長雄は、外山正一(1848-1900)とフェノロサの教え子であった。外山正一は、学生によって「スペンサー輪読の番人」と仇名されたという(三上参次「外山正一先生小伝」『山存稿』前編, 東京:丸善, 1909年; 湘南堂書店, 1983年復刻, 32-33頁)。ともに日本における進化論の伝播に大きな役割を果たした人物であった。

(53) 当時の反響について、山路愛山(1865-1917)は次のように記している。「蓋し明治十三四年以後の大学が日本の精神界に寄與したる活動二あり。一はモールス博士に依れる進化論なり。二は加藤弘之に依れる人権否定説なり。(中略)されど大学が世間の物議を招きたるはダルウキンの進化論を基礎として天賦人権論に痛撃を加へたる大学総理加藤弘之の挙動なりき。」(山路愛山『基督教評論』警醒社書店, 1906年。山路愛山著・山路平四郎校注『基督教評論・日本人民史』岩波文庫, 1966年, 71-72頁)。

(54) なお、加藤弘之の著作の中国語訳として、『人種新説』『人権新説』の誤りではないか?、『天則百話』、『加藤弘之講演集』、『自然界之矛盾与進化』、『物競論』、『政教進化論』などが挙げられている(実藤恵秀監修・譚汝謙主編・小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』香港中文大学出版社, 1980年)。

(55) 「物競論」は楊蔭杭によって中国語に訳され『訳書彙編』(1901年, 第4, 5, 8号)に連載された。鄒振環『影響中国近代社会的一百種訳作』中国对外翻译出版公司, 1996年, 148-151頁を参照。

(56) 「自由書・論強権」『清議報』31, 1899年12月(『飲冰室文集点校』4, 2268頁)。

(57) 例えば、「国家思想変遷異同論」(『清議報』94, 95, 1901年10月)において、梁啓超は、国家思想をめぐる「平権派」と「強権派」の二派を挙げている。

(58) 「十種徳性相反相成義」『清議報』82, 84, 1900年6月16日, 7月6日。利己と利他の関係性をめぐる加藤の見解について、前掲川尻文彦「「進化」と加藤弘之、嚴復、梁啓超——「進化」をめぐる近代日本、中国間の「概念」連鎖」(150-153頁)に詳しい。

(59) 「十種徳性相反相成義」『飲冰室文集点校』2, 695頁。

(60) 「加藤博士《天則百話》」『新民叢報』21, 1902年11月30日。梁啓超が訳して掲載したのは「原話一 実学空理之辨」,「原話十三 自由研究〔原話十四の誤り〕」,「原話十四 我輩九百九十年前之祖宗〔原話十三の誤り〕」,「原話九十四 利己心之三種」の四つである。こういった翻訳対象の選択から梁啓超の問題関心をうかがうことができるであろう。

(61) 「加藤博士《天則百話》」『飲冰室文集点校』4, 2308-2309頁。

(62) 同上, 2312頁。

(63) 同上, 2308-2309頁。

(64) 同上, 2312頁。

(65) 同時期、梁啓超は「功利主義」とも思想的に格闘した。その知的葛藤の軌跡をたどったのが、佐藤豊「梁啓超と功利主義——加藤弘之『道德法律進化の理』に関連して」(『中国——社会と文化』13, 1990年)である。また、「原話九十四 利己心之三種」の訳文の後、梁啓超は「唯物的利己心、本文未有明説、博士別有所著《道德法律進化之理》一書、言之最詳、他日当挹訳之參觀、辺沁学説案語、亦見其概。」(「加藤博士天則百話」『飲冰室文集点校』4, 2312頁)と注記している。「楽利主義之泰斗辺沁〔ベンサム〕之学説」(『新民叢報』15, 16, 1902年9月2日, 16日。『飲冰室文集点校』1, 416-417頁)を参照。なお、宮村治雄によると、ベンサム関連のこの論説は多くの典拠を持っており、その成立が極めて複雑であるという。そのうち、加藤弘之の『道德法律進化の理』も挙げられている。前掲宮村治雄「梁啓超の西洋思想家論——その「東学」との関連において」(『開国経験の思想史——兆民と時代精神』東京大学出版会, 1996年, 232頁)を参照。

- (66) 「十種徳性相反相成義」(『清議報』82, 84, 1900年6月16日, 7月6日)や「論中国国民之品格」(『新民叢報』27, 1903年3月12日), 「論独立」(『新民叢報』30, 1903年4月26日)などにおいて, 中国人の国民性を言うとき, 「散沙」という言葉が用いられている。
- (67) 「十種徳性相反相成義」『飲冰室文集点校』2, 692頁。
- (68) 「新民説・論自由」『新民叢報』7, 8, 1902年5月8日, 22日(『飲冰室文集点校』1, 575頁)。
- (69) 「新史学・史学之界説」『新民叢報』1, 1902年2月8日(『飲冰室文集点校』3, 1633頁)。
- (70) 「論独立」『飲冰室文集点校』2, 716頁。
- (71) 「二十世紀之巨靈托拉斯〔トラスト〕」『新民叢報』40・41, 42・43, 1903年11月12日, 12月2日(『飲冰室文集点校』2, 1086頁)。
- (72) 「開明専制論」『新民叢報』73-75, 77, 1月25日, 2月8日, 25日, 3月25日(『飲冰室文集点校』3, 1396頁)。
- (73) 梁啓超は「政治学大家伯倫知理〔ブルンチュリ〕之学説」(『新民叢報』30, 1903年5月25日)を発表した。加藤弘之は, 1872年に, ブルンチュリの『一般国家学』(1851年)を進講し, 訳稿を『国法汎論』として刊行し, 早い段階からブルンチュリの紹介に努めていた。加藤弘之のブルンチュリ受容について, 安世舟「明治初期におけるドイツ国家思想の受容に関する一考察——ブルンチュリと加藤弘之を中心として」(日本政治学会編『年報政治学——日本における西欧政治思想』岩波書店, 1975年)が参考になる。なお, 梁啓超におけるブルンチュリ受容について, 鄭匡民『梁啓超啓蒙思想的東学背景』(上海書店出版社, 2003年), 狭間直樹「梁啓超研究について思う——“知層”としての「明治日本」」(陶徳民・藤田高夫編『近代日中関係人物史研究の新しい地平』雄松堂出版, 2008年)に詳しい。
- (74) 「進化論革命者頡徳〔キッド〕之学説」『新民叢報』18, 1902年10月16日。キッドの社会哲学は, ロマン主義哲学の反理性主義的傾向と進化論的生物哲学の融合で, 人間理性は社会そのものの存在を危うくする崩壊力であると信じ, 社会進歩の主要条件を集団の拘束(宗教の制裁)に求めるものである。その科学的・論理的な貧困さが顕在するにもかかわらず, 二十世紀のはじめ, 宗教と進化論の和解を願望した一般民衆のなかで流行した(荒正人ほか編・大内兵衛ほか監修『世界名著大事典』8, 平凡社, 1962年を参照)。
- (75) 「進化論革命者頡徳之学説」『飲冰室文集点校』1, 423頁。梁啓超のいう『泰西文明原理』の原著は, Benjamin Kidd, *Principles of Western Civilization*, New York; London: Macmillan, 1902である。
- (76) 梁啓超のいう『人群進化論』の原著は, Benjamin Kidd, *Social Evolution*, New York; London: Macmillan, 1894である。なお, 当時東京帝国大学教授の外山正一は, 「人生の目的に関する我信界」(1896年4月18日, 哲学会にて)と題した講演のなかで, キッドを取り上げている(後に『哲学雑誌』11-114, 1896年8月10日に掲載)。日本語訳は, ベンジャミン・キッド著, 角田柳作訳『社会之進化』開拓社, 1899年である。中国語訳も, ほぼ同時期に出版されたという。詳細は, 森紀子「梁啓超の仏学と日本」の第三節「進化論と死生観」(狭間直樹編『共同研究 梁啓超: 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房, 1999年, 209頁)を参照。
- (77) 「進化論革命者頡徳之学説」『飲冰室文集点校』1, 423頁。
- (78) 同上, 424-425頁。
- (79) 同上, 425-426頁。
- (80) この時期において, 「革命」や「排満」を提唱したことや態度を変化させた経過について, 梁啓超は『清朝學術概論』のなかで次のように回想している。「梁啓超が, 日ごろ革命排満共和の議論を提唱するようになると, 師の康有為は大いに不満としてしばしばかれを叱責し, ついでは婉曲に勧告して, 二年間に数万言におよぶ手紙を寄せた。梁啓超もまた, 当時の革命家の活動にあきたらず, 糞に

こりてなますを吹き、主張にもいささか変化をきたした。しかし保守性と進歩性とは、つねに心の中で相戦い、感情とともにあふれ出て、その主張はしばしば前後相矛盾することになった。かつてみずから、「こんにちの我をもって、昔日の我を批難することをいとわない」と称したが、世間の多くはこれを欠点だとし、その言論の効力もしばしば相殺されたのは、おそらく生来の短所がそうさせたのであろう。」（前掲『清代学術概論——中国のルネッサンス』、278頁）。

- (81) 例えば、「新民説・論尚武」（『新民叢報』28, 29, 1903年3月27日, 4月11日）, 『中国之武士道』（広智書局, 1904年）, 「余之死生観」（『新民叢報』59, 60, 1904年12月21日, 1905年1月6日）などがある。